東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

教育実習Ⅱの実施状況と意義に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): Teaching Practice 作成者: 宮内, 卓也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173796

東京学芸大学次世代教育研究センター紀要　第３巻　pp. 55-62，2022

教育実習Ⅱの実施状況と意義に関する一考察

宮　内　卓　也*

（2022年１月11日受理）

MIYAUCHI,T.; A Study on the Implementation Status and Significance of the Elective Course “Teaching Practice II”.

ISSN 2435-3876

The Tokyo Gakugei University has established an elective course, Teaching Practice II, in addition to the compulsory Teaching Practice I, and it is proactively encouraging students with strong aspirations toward the teaching profession to take the course. According to the Web survey on the implementation status of Teaching Practice II, conducted among the students who participated in the course in Academic Year 2021, all the student participants regarded the experience positively. In particular, the students found the course meaningful in the following respects: “I learned about realities such as the differences between affiliated and non-affiliated schools, differences in school types, and the problems teachers face on the ground,” “I had the opportunity to take part in classes and school activities to gain a lot of experience,” “I have learned about the various tasks teachers engage in, through experience and observation outside of the classroom,” and “The course strengthened my motivation to pursue the teaching profession.”

Keywords : Teaching Practice

* *Research Center for Education in the Next Generation, Tokyo Gakugei University*

１．研究の背景と目的

東京学芸大学では３年次の９月・10月期に教員免許の主免許取得のための３週間の教育実習（教育実地研究Ⅰ）を実施している。教育実地研究Ⅰでは主免許取得に要する教育実習事前・事後指導１単位を含む教育実習に関わる５単位を修得することができる。教育実地研究Ⅰは教員を目指す学校教育系の課程に所属する学生に対して必修の教育実習として位置づけられており，附属学校園で教育実習を行うことを基本としている。

本学ではさらに，４年次の６月期を中心に，教職志望の強い学生を対象とした３週間の教育実地研究Ⅱを設定している。教育実地研究Ⅱは協力学校で行うことを基本とした選択の教育実習であり，**図１**のように教育実地研究Ⅰと教育実地研究Ⅱとを積み上げ，段階的に学ぶ構成となっている。

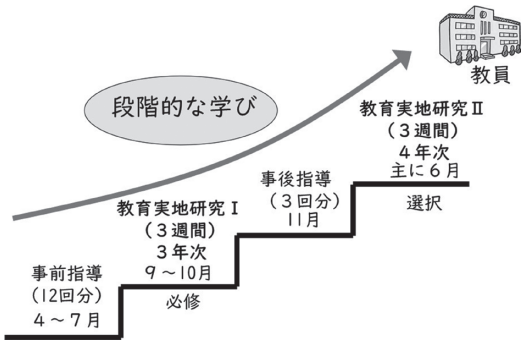

図１　東京学芸大学の教育実地研究ⅠとⅡの構成

* 東京学芸大学 次世代教育研究センター

小学校教員を目指す初等教育教員養成課程では，東京都教育委員会を通して都内の公立小学校に配当することを基本としている。中学校，高等学校の教員を目指す中等教育教員養成課程では，学生自身が母校と交渉して実習校を開拓することを基本としているが，学生ボランティアなどで縁のあった学校で教育実習を行う学生もいる。諸事情で学生による母校開拓が難しい場合は，大学の指導教員や学務課教育実習係が相談に応じている。

本学では，教育実地研究Ⅰに加えて教育実地研究Ⅱを積み上げることにより，教員に必要な資質・能力を育成し，教職への意欲を高めることをねらっており，教職志望の高い学生に対しては教育実地研究Ⅱの履修を積極的に勧めている。その際，教育実地研究ⅠがＢ以上の評価であること，教員採用試験を受験予定であること等を履修条件として挙げ，一定のハードルを設けることで，協力学校で教育実習を行う学生の質保証を図っている。本来，教職志望の学生に対して，進んで履修することが期待されているが，必ずしも教職志望者すべてが履修しているという状況ではない。そこで，本研究では教育実地研究Ⅱの実施状況と教育実地研究Ⅱに参加した学生の意識を調査し，学生の立場から見た教育実地研究Ⅱの実態と意義を把握するとともに，今後の教育実地研究Ⅱのあり方について検討してみたい。

2021年度の教育実地研究Ⅱは主に６月期を中心に実施された。2020年度の教育実地研究ⅡはCOVID-19の感染拡大により大学として中止の方針を示し，選択の実習であることから代替措置はとらないこととした。2021年度は大学として実施の方針を示したが，実際に教育実地研究Ⅱを実施するためには，広く学校現場の理解が必須である。政府からは４月25日にCOVID-19による緊急事態宣言が発令され，６月20日まで続いた。６月21日からは緊急事態宣言は解除されたものの，まん延防止等重点措置が適用され，７月11日から再び緊急事態宣言が発令されるという状況であった。このように，2021年度の教育実地研究Ⅱは厳しい状況下での実施となったが，ほとんどの協力学校に教育実習生を受け入れていただくことができた。

２．Web調査の概要

2021年度の教育実地研究Ⅱに参加した学生を対象にMicrosoft Formsを用いたWeb調査を実施し，96名の回答を得た。96名のうち，小学校で実習を行った学生は54名，中高一貫校，中等教育学校を含む中学校・高等学校等で実習を行った学生は42名であった。Web調査については，**表１**に示した項目で行った。調査結果を検討するにあたっては，このような状況下での教育実習であったことを念頭に置く必要があるが，授業観察や授業実践の回数を見るかぎりでは，少しでも通常の教育実習に近い形で教育実習を実施できるよう，協力校の先生方が工夫していただいたようすがうかがえる。

表１　Web調査の質問項目と回答方法

① 教育実習を行った実習校の種類（選択肢）
　小学校／中学校／高等学校／中等教育学校
② 担当した授業の回数（数値）
③ 初めて担当した授業が実習の何日目であったか（数値）
④ オリエンテーション（事前の学校園訪問日等）に観察した授業の回数（数値）
⑤ 実習期間中に観察した教員の授業の回数（数値）
⑥ 実習期間中に観察した実習生の授業の回数（数値）
⑦ 出勤時刻として，最も多かった時刻に近いもの（選択肢）
　8：00前／8：00／8：10／8：20／8：30
⑧ 退勤時刻として，最も多かった時刻に近いもの（選択肢）
　17：00前／17：00／18：00／19：00／20：00／21：00／22：00／22：00以降
⑨ 実習期間前に，実習校園の先生から教科・領域に関する指導を受ける機会の有無（選択肢）
　あった／なかった
　　あった場合：その指導の手段（選択肢）　実習校を訪問／電話，メール，遠隔会議システム
　　実習校を訪問した場合：回数（数値）
　　電話，メール，遠隔会議システムの場合：回数（数値）
⑩ 教育実地研究Ⅱを行ってみて，その意義を感じたか（選択肢）
　感じた／どちらかというと感じた／どちらかというと感じなかった／感じなかった
⑪ ⑨でそのように回答した理由（自由記述）
⑫ 実習校園の先生方からいただいた指導について思うこと，考えていること（自由記述）
⑬ 教育実地研究Ⅱで学んだこと，印象に残ったこと，感想，意見，要望など（自由記述）

３．Web調査の結果

３．１　担当した授業の回数

教育実習期間中に担当した授業の回数と人数の関係を調べたところ，**表２**のようになった。

表２　授業の担当回数と人数の関係

学校種	平均値（回）	中央値（回）
小学校	15.1	15
中学校・高等学校等	15.6	15

平均すると，教育実習期間中の授業実践の回数は，小学校で教育実習を行った学生で約15回，中学校・高等学校等で教育実習を行った学生で約16回であった。平均で比較すると，校種による差異はほとんどないといえる。ただし，配当される学校によって授業実践の回数には差異があり，小学校で４回から30回，中学校・高等学校等で２回から34回と幅がある。ただし，小学校で５回と記した学生１名と中学校・高等学校等で２回と記した学生１名は養護教諭を目指す教育実習生であり，中学校・高等学校等の4回と記した学生１名は学校行事と重なったことを**表１⑬**の項目で記述しており，極端に授業実践の回数が少ない教育実習生については，事情があるものを含んでいる可能性がある。

参考までに，本学の2017年度の附属の中学校・高等学校等の教育実地研究Ⅰにおける授業実践の回数の平均は8.8回である[1)]。本稿の教育実地研究ⅡはCOVID-19流行下での教育実習ではあったが，附属学校に比べると平均値で2倍程度の授業実践の回数が確保されていることになる。

３．２　最初に授業を担当した時期

最初に授業を担当した日と人数の関係を調べたところ，**表３**のようになった。

表３　授業を初めて担当した日と人数の関係

学校種	１日目	２日目	３日目	４日目	５日目	６日目	７日目	８日目	９日目	10日目	11日目
小学校	2	3	6	6	12	15	5	3	2	0	0
中・高等	2	6	4	8	8	6	1	2	1	3	1

表３を見ると，最初に授業を担当した日の分布には幅が見られた。教育実習の１週目の終わりや２週目の初めに最初の授業実践に取り組んだ例が比較的に多いが，１週目のはやい時期に授業実践に取り組んだ例も少なくない。本来は，観察，参加，実践のステップを踏むことが望まれる。学校行事や感染対策などの校内事情，指導教員の考え方などが影響している可能性があるが，極端に早いものや，極端に遅いものについては問題である。

３．３　授業観察の機会について

教育実習前，および教育実習期間中の授業観察の機会に注目し，教育実習前の教員の授業，教育実習期間中の教員の授業，教育実習期間中の教育実習生の授業について，観察回数の平均値を調べたところ，**表４**のような結果となった。

表４　授業参観の回数の平均

学校種	実習前（教員）	実習中（教員）	実習中（実習生）
小学校	0.8	33.3	0.8
中学校・高等学校等	0.3	17.8	4.4

教育実習前の教員の授業の観察回数の平均は，小学校，中学校・高等学校等ともに１回に満たず，実際に授業

観察を経験した教育実習生は小学校で15名，中学校・高等学校等で６名である。大半の教育実習生は教育実習前の教員の授業観察は経験していないといってよい。

教育実習期間中の教員の授業の観察回数の平均は，小学校で約33回，中学校・高等学校等で約18回であった。教育実習期間中の教育実習生の授業の観察回数の平均は，小学校で約１回，中学校・高等学校等で約４回であった。

参考までに，本学の2017年度の附属中学校，高等学校等の教育実地研究Ⅰにおける教員の授業の観察回数の平均は5.4回，教育実習生の授業の観察回数の平均は16.9回である[1)]。

小学校と中学校・高等学校等を比較すると，小学校における教員の授業の観察回数の方が比較的に多い傾向にある。これは，学級担任制のもと，１日の学級の姿をじっくりと追いかけていることによるものであろう。中学校・高等学校等では教科担任制のもとで，教科をベースに指導を受けていることとのちがいによると考えられる。

附属学校では，各教員がそれぞれ多くの教育実習生を担当する。そのため，協力学校では，相対的に教員が行う授業を観察する機会は多くなり，教育実習生相互に授業を観察する機会は少なくなる傾向がある。

３．４　出退勤時刻

教育実習期間中の出勤および退勤の時刻について，最も多かった時刻に近いものを選択させたところ，**表５**のようになった。**表５**の上表が出勤時刻，下表が退勤時刻についてまとめたものである。

表５　授業参観の回数の平均　上表：出勤時刻　下表：退勤時刻

学校種	8：00前	8：00	8：10	8：20	8：30
小学校	41	9	2	1	1
中・高	26	11	4	1	0

学校種	17：00前	17：00	18：00	19：00	20：00	21：00	22：00	22：00以降
小学校	1	4	28	14	4	1	0	1
中・高	3	7	12	11	5	3	0	0

出勤時刻を見ると，ほとんどの教育実習生が8：00またはそれ以前に出勤していることがわかる。一方，退勤時刻には幅があるが，多くの教育実習生は18：00から19：00頃まで勤務していることがわかる。一般的な勤務時間内で退勤している教育実習生はきわめて少数である。

文部科学省が平成28年度に行った教員勤務実態調査[2)] によれば，小学校教諭，中学校教諭の１日あたりの学内勤務時間がそれぞれ11時間15分，11時間32分とある。このデータが学内勤務時間であることを踏まえれば，実働時間はさらに長いと推定される。教育実習生の勤務時間はこうした教員の勤務実態を反映したものでもあるだろう。加えて，教育実習生はまだ実践的な資質・能力は未成熟であり，授業の質を保証するためには，授業準備に相応の時間を要するという面もある。教員の働き方改革と合わせて，教育実習における勤務のあり方も，改めて問われている課題である。

３．５　事前の指導の有無と手段

教育実習前の指導の有無と実施形態について調べたところ，**表６**のようになった。小学校の教育実習生は原則として実習校は東京都の公立小学校なので，学校の所在地が比較的に近隣である。一方，中学校・高等学校の教育実習生は原則として実習校は母校なので，学校の所在地が東京都外であるケースも多く，地理的に対面実施が困難な場合も考えられる。

事前に指導の場があった教育実習生は比較的少数であり，事前指導を行う場合，多くの学校は実習校に訪問することを基本としながら，一部で電話，メール，遠隔会議システム等を併用しているようすがみられる。複数回の指導を行っている例は，きわめて少数である。

教育実地研究Ⅰでは，すべての附属学校で事前にオリエンテーションと指導教員による事前指導を行っており，教育実地研究Ⅰと教育実地研究Ⅱとの大きな差異がある。一方，2021年度はCOVID-19流行下であったことが一部で影響している可能性はある。

表６　事前指導の有無と実施形態

学校種	事前指導	方　法	回　数
小学校	あり（14名）	実習校を訪問（12名）	１回（7名）２回（4名）７回（1名）
		電話，メール，遠隔会議システムを使用（0名）	－
		訪問と電話，メール，遠隔会議システム併用（2名）	訪問１回，他１回（1名） 訪問１回，他３回（1名）
	なし（40名）		
中・高	あり（13名）	実習校を訪問（6名）	１回（5名）２回（1名）
		電話，メール，遠隔会議システムを使用（2名）	１回（1名）４回（1名）
		訪問と電話，メール，遠隔会議システム併用（5名）	訪問１回，他１回（3名） 訪問１回，他５回（1名） 訪問１回，他20回（1名）
	なし（29名）		

３．６　教育実習Ⅱの意義

教育実地研究Ⅱの意義について，感じた，どちらかというと感じた，どちらかというと感じなかった，感じなかった，の４件法でたずねたところ，**表７**のようになった。

表７　教育実地研究Ⅱの意義を感じたかという点についての回答と人数

学校種	小学校	中学校・高校等
意義を感じた	51	39
どちらかというと意義を感じた	3	3
どちらかというと意義を感じなかった	0	0
意義を感じなかった	0	0

選択履修なので，もともと教職への意欲が高い学生であるという前提はあるが，回答した学生全員が教育実地研究Ⅱの意義について肯定的に回答しており，そのほとんどが「意義を感じた」を選択していることから，教育実地研究Ⅰを経験した上で，さらに教育実地研究Ⅱを経験したことについて，参加した学生の大半が強く意義を感じていることがわかる。意義を感じた，どちらかというと意義を感じたと回答した理由について，自由記述で回答を求め，その回答を類型に分けて人数を整理したところ，**表８**のようになった。

「附属学校とはまた異なる，多様な児童の存在を実感し，児童理解に基づいた授業づくりや支援について考えを深めることができた」「公立校の雰囲気や生徒の様子，教員のリアルな仕事量を垣間見ることができ，教員を志望する上で参考になる点が多かった」などの記述があった。附属とのちがい，校種のちがい，現場の課題などの実態を知ったという点からの記述が最も多く見られた。

「授業の回数が多く経験を積めたため」「基礎実習よりも授業数がかなり多く実際の教員の一日により近い実習を行うことができた」「同じ内容を扱う学級数が多く，先に行った授業の反省を踏まえて改善することができた」などの記述があった。実践機会に恵まれたことを肯定的に捉えた記述が多く見られた。

「職員会議や指導部会などに参加し，公立小学校の先生の働き方について詳しく知ることができた」「実習生が少なく，職員室にいたため，授業以外の教員の仕事を観察できた」などの記述があった。授業以外の経験や観察を通して，教員の多様な仕事を知ったという点からの記述が多く見られた。

「教師になる決意が固まった」，「教壇に立つ楽しさを実感できた」という記述があった。教育実地研究Ⅱが進路決定に大きく影響している様子が見られた。

表８　教育実地研究Ⅱの意義を感じた理由の回答類型と人数

回答類型	小	中，高
附属とのちがい，校種のちがい，現場の課題など，実態を知った	17	19
授業や学活の実践機会に恵まれ，多くの経験を積むことができた。	16	11
授業以外の経験や観察を通して，教員の多様な仕事を知った。	19	6
教職への向けてのモチベーションが高まった。	6	6
多校の子どもと触れ合い，深く関わることができた	5	4
附属実習の課題をもとに，さらに改善をはかることができた	0	3
実習を通して，多くのことを学ぶことができた（総括的な回答）	7	7
実習を通して，教職のイメージが具体的になった（総括的な回答）	4	5

３．７　指導教員の指導

この調査項目では，実習校の先生方からいただいた指導について思うこと，考えていることを自由記述により回答を求めた。

小学校の教育実習生54名中42名，中学校・高等学校等の教育実習生42名中26名が指導教員の指導について肯定的に振り返っており，ていねいで親身な指導，授業づくりに関わる細やかな指導を受け，教員の多様な校務や教員としてのあり方に至るまで，指導教員から広く多くのことを学んでいることをうかがうことができる。教職への意欲の高まりや教職の魅力への気づきに触れる記述も見られた。

一方，小学校の教育実習生54名中３名，中学校・高等学校等の教育実習生42名中４名が指導教員の指導について否定的に振り返っており，少数ではあるが，その課題を整理しておきたい。課題を大きく分けると，指導教員との人間関係，指導教員の指導方針への疑問，情報伝達の不良に分けて考えることができる。

指導教員との人間関係については，例えば，「ご指導いただいた事の中には納得できないことも多々あった。授業について建設的なご意見を頂けることが少なかった」「正直なところ心無い言葉を指導教員からかけられることも多く，教員になりたくないと思ってしまった」という記述が見られた。このような事例では，指導教員，教育実習生双方に言い分があると考えられるが，このような関係になっていることが不幸なことである。

指導教員の指導方針への疑問については，例えば，「担当教員は子どもに対し，叱ることが多く，子どもを縛り付けるような指導だった」「教科の内容についてあまり指導いただく機会がなく，授業の数をこなすことがメインになってしまった」「母校は割とかっちりと授業スタイルが決まっており，それに応じて授業をしなければならなかった」という記述が見られた。教育実地研究Ⅱに参加した学生は２回目の教育実習となるため，それぞれの学生が個々の具体的な教育観を抱きつつある。指導方針に共感できない場合にどのように折り合いをつけるのかという点で悩んでいたようすがうかがわれる。一方，教育実習生が共感し難い指導方針についても，謙虚にその意図や効果を検討し，知見を広げる機会と捉えれば，有意義な経験に転じるという面もある。また，授業に関して十分な指導を受ける機会がなかったという指摘については，放任と捉えている学生もいるが，一方で任されたと前向きに捉える記述も見られた。

情報伝達の不良については，「実習が始まる前の連絡が少なかったため，始まるまで不安になってしまった」という記述が見られた。協力校は教育実習生を受け入れることが本来の校務ではなく，それぞれの学校によって方針や対応が異なることが多い。大学と協力学校で配慮すべき点を点検する必要があるが，学生が受け身にならず，積極的に情報を収集するという姿勢も重要であろう。

３．８　学んだこと，印象，感想，意見，要望

教育実地研究Ⅱで学んだこと，印象に残ったこと，感想，意見，要望などについて，自由記述により回答を求めた。

学んだことについては，授業づくりに関わるもの，学級経営に関わるもの，教員の仕事全般に関わるものまで広く記述されており，学んだことが多岐に渡ることがわかる。

印象については，児童・生徒との関わりに関するもの，教員同士の関係性に関わるもの，教員の校務に関わるものまで広く記述されており，肯定的な記述が多い。負の側面を指摘する記述も見られたが，反面教師として捉える記述も見られ，経験したことに意味を見いだそうとする姿が多く見られた。

感想，意見，要望については，大学と協力学校との情報伝達に関わる指摘があり，先に述べたように，大学と協力学校で配慮する点を点検する必要があるが，学生が受け身にならず，積極的に情報を収集するという姿勢も重要であろう。また，選択となっている教育実地研究Ⅱについて，教職を志望するのであればぜひ参加した方がよいという申し送りのような記述が見られた。こうした声は大学のカリキュラムの編成上も重要であり，これから教育実習に向かう学生にも伝えていきたい声である。

５．まとめと今後の課題

５．１　まとめ

東京学芸大学では，教育実地研究Ⅰを必修実習と位置付けて附属学校園で教育実習を行い，主免許に必要な教育実習の単位を修得し，教職志望の高い学生が教育実地研究Ⅱを選択し，さらに学びを深める構成となっている。

教育実地研究Ⅰでは授業づくりを大切にしながら学校現場全般についての実習を行う。附属学校での実習となるため，ほぼすべての教員が教育実習生を担当し，多くの実習生が配当されるのが特徴である。そのため，教育実習生相互で意見を交換しながら授業を練り上げたり，相互に授業実践を観察する機会は多いが，教員の授業を観察したり，教育実習生自身が授業実践をしたりする回数は相対的に少ない傾向がある。また，教育実地研究Ⅰで指導の対象となる附属学校園の児童・生徒は，入学時に何かしらの選抜を経て入学しており，毎年，多くの教育実習生の授業を受けているという点においても，特徴のある幼児・児童・生徒の集団であるといえる。

教育実地研究Ⅱでは，教育実地研究Ⅰでの経験を基に，学校現場全般についての実習を行う。協力学校での実習となるため，教育実習を担当する教員は一部で，配当される実習生も附属学校に比べればきわめて少数である。教育実習生相互で意見を交換して授業を練り上げたり，相互に授業実践を観察したりする機会は少ないが，指導教員が担当する授業を任されることが多く，授業実践の回数は相対的に多くなる。小学校においては，担任の学級に一人でじっくりと関わることにつながり，中学校・高等学校等においては，複数の学級の授業に関わることにつながり，各実習生が自立的に実践に取り組むことが求められる。また，授業に関わる校務以外にも多様な校務に触れる機会が多く，学校現場全般にわたって広く学ぶことができる可能性がある。

教育実地研究Ⅱに参加した学生は，協力学校に教育実習に行くことについて，きわめて肯定的に捉えており，特に「附属とのちがい，校種のちがい，現場の課題など，実態を知った」「授業や学活の実践機会に恵まれ，多くの経験を積むことができた」「授業以外の経験や観察を通して，教員の多様な仕事を知った」「教職への向けてのモチベーションが高まった」という点で意義を感じていることがわかった。

５．２　今後の課題

今回の調査を通して，教育実地研究Ⅱについて，教育実習生が意義を感じていることが明らかになったが，附属学校園における教育実習の経験がベースにあったことによる影響は大きいのではないかと考えることもできる。改めて教育実地研究Ⅱに参加した教育実習生の立場から附属学校園における教育実習の意義と課題を調査することにも意義があるのではないか。

教育実地研究Ⅱは選択の教育実習として位置づけられている。そのため，教職を志望している学生でも，さまざまな理由から教育実地研究Ⅱを履修しない学生が少なくない。教職とともに民間会社への就職を検討していたり，教員採用試験の準備が気になっていたり，大学院進学の準備が気になっていたり，初等教育教員養成課程に所属しながら中学校・高等学校等の教員を志望していたりなど，教職希望があっても教育実地研究Ⅱを希望しない理由はさまざまである。教育実地研究Ⅱの意義を広く伝えるとともに，教育実地研究Ⅱのあり方についても広く検討がなされる必要がある。

少数ではあったが，指導教員の心無い言葉によって傷つき，教職へのモチベーションを低下させている学生が存在することも見逃してはならない。このことは必ずしも教育実地研究Ⅱに限ったことではない。教育実習の指導教員と教育実習生が負の関係に至る背景にはさまざまな要因が考えられるが，このような関係性が指導教員と教育実習生双方にもたらすメリットは何もないといってよい。また，少数ではあるが，教科指導について，十分な指導を受けることができなかったという声もあった。教育実習における教育実習生の指導のあり方について，附属学校のみならず，広く教育実習の指導にあたる可能性のある教員全体で共有する必要があるだろう。

参考文献

1）宮内卓也・松崎尚文：附属学校と協力学校の教育実習における状況に関する一考察，東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要，15，pp.79−85，2019.

2）文部科学省報道発表資料,「教員勤務実態調査（平成28年度）の分析結果及び確定値の公表について（概要）」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/09/27/1409224_004_3.pdf（2021年12月29日）